



叡智の杜レポート拡大版

この秋、宮城県図書館では、より多くの方に図書館に足を運んでいただけるように、大きな催しを2つ開催しました。ひとつは、東北大学附属図書館との合同企画展「関孝和没後300年記念 はっぴいさんぼう ―和算の世界へようこそ!―」、もうひとつは「みやぎ県民大学開放講座「叡智の杜を訪ねて」」です。今回は、図書館資料を活用した情報発信の取組みを紹介します。



「関孝和没後三百年記念 はっぴいさんぼう ―和算の世界へようこそ!―」を開催しました。

① 日本生まれの数学「和算」を知る企画展

平成20年10月25日(土)から11月24日(月)までの1ヶ月間、本館展示室を会場として、東北大学附属図書館との合同企画展を開催しました。本館には、仙台藩ゆかりの和算家・戸板保祐(1708~1784)が編纂した『関算四伝書』をはじめ、多くの和算書が伝えられています。今回は、国内有数の自然科学系古典コレクションを有する東北大学附属図書館と合同で企画運営を行い、両館の所蔵資料から約90点の和算関係資料を展示しました。会期中には、延べ2,566人が来場しました。

また、この合同企画展を記念して、和算に親しむ講演会を開催しました。児童文学作家の遠藤寛子氏による「算法少女のなぞ」(10月25日講演)、東北大学名誉教授 土倉 保氏による「和算を楽しんだ江戸時代の人々」(11月8日講演)、宮城教育大学教授 萬 伸介氏による「いろいろな見方で楽しもう! 和算の問題」(11月8日講演)には、延べ190人が参加しました。



和算に親しむ講演会

② 数への関心と、和算の発展を支えた和算家たち

和算は日本生まれの数学で、江戸時代に広く親しまれました。和算がそろばんや九九など暮らしの技術として、また遊びのひとつとして庶民化するきっかけとなったのが、『塵劫記』(吉田光由著)でした。

『塵劫記』は、庶民に親しまれた代表的な和算書です。中国などの算術書の影響を受けつつも、九九やそろばん、売買や計量・測量といった、暮らしに必要な知識が丁寧にとらえられている点に特徴があります。『塵劫記』の人気とともに、『～塵劫記』などと名を借りた海賊版も広く出版されました。海賊版の内容は原書の部分抜粋や引き写しが主で400種とも言われます。仙台においても、同種の類似本が刊行されています。

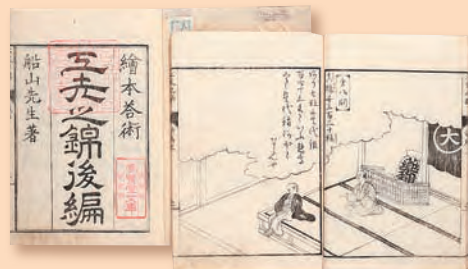
人々が数への関心を高めつつあった江戸時代の前期、関孝和(1640頃~1708)は、和算界にさっそうと登場します。関は従来の天元術(算木を使って解く方法)に代わる演段術(筆算で解く方法)を編み出したほか、数多くの重要な発見を行っています。

関孝和により体系化された和算は、江戸時代を通じて大き

く花開きます。江戸や上方ではさまざまな流派の算家が技を競い合い、その成果ははるか遠く陸奥・仙台の地までもたらされました。仙台藩で天文学者として勤めた戸板保祐は、関流和算を学んだ和算家でもあり、関流和算家たちの著作や、戸板自身の著作などを収録した関流の集大成『関算四伝書』を編さんしています。また、各地を遊歴して算術指導などを行う「遊歴算家」と称される研究者も現れました。

展示会では、豊富な所蔵資料と解説パネルを用いて、和算の発展とそれを支えた和算家たちについて紹介しました。

● こんな資料を展示しました ●



『絵本工夫之錦』 前編2後編1 3冊
船山輔之著 寛政10年(1798)刊

船山輔之(1738~1804)は仙台藩の天文方で、はじめは戸板保祐に学びました。本書は、算術の問題に関係する絵を描き、子どもの関心を誘うねらいをもって書かれました。



『早割算法日用記』 1冊 文化2年(1805)刊

大小の数の呼び方や様々な物の単位、九九や割り算など日常用いられる算法について解説しています。版元は伊勢屋半右衛門という、仙台の書肆(本の出版・販売をする店)です。



『関算四伝書』 511冊(存507冊、要伝80~83欠)
戸板保祐編 安永9年(1780)写

「関算前伝」「関算後伝」「関算要伝」「関算完伝」という4つの区分からなり、総称して「関算四伝書」と呼ばれています。現存する507冊が宮城県有形文化財(書跡・典籍)に指定されています。